

鈴木大助

Daisuke Suzuki

1981年2月25日、迫町錦東生まれ。愛知県瀬戸市在住。3歳の誕生日前に父からミニバイクを預けられ、補助輪をつけて乗る。3人兄弟の長男で、次男拓也、3男耕太も小学校に入る前からバイクに乗りモトクロス始める。高1で国際B級、高3で同A級ライセンスを取得し、同級125ccクラスで活躍。2002年からフリースタイルに転向し、世界最高峰の大会REDBULL X-Fightersなどにも出場。3男の耕太もフリースタイル選手。愛称は「DAICE(ダイス)」妻、娘、息子の4人家族。168㎝、65㎏。



モトクロス東北選手権5連覇や高校生での国際A級昇格
フリースタイル転向後には、世界最高峰の大会で入賞
数々の華々しいキャリアは、人知れぬ努力の賜物
自分と仲間を信じ、さらに夢へ向けて加速していく



- 1) 見た目は「今時」で、明るく接しやすいキャラクターだが、中身は礼節をわきまえ、人とのつながりを重んじる日本男児
- 2) フリースタイル転向後から、鈴木が「匠の技」を支えるヤマハYZ250。大会や練習後は、すぐに洗車、整備され、常に万全の調子に仕上げられている

父の趣味がモトクロス（以下MX）だったことから、おもちゃ代わりに預けられたミニバイク。気がつけば近場のコースでほぼ毎日練習していた。

「小3、4の頃はレースではなく、友達と遊びたいと思っていました。好きだけど、どこかで乗らされている感じがあったので」

鈴木は、日曜日に友達と遊んだ記憶がない。レースは金曜日練習走行、土曜日予選、日曜日が決勝のスケジュール。車で片道500kmの移動は当たり前だった。当然、学校行事は、出られないものが増えていった。

しかし、小5になるとレースに集中。MXは、小5からジュニアクラスにエントリーできる。ここでチャンピオンになるという明確な目標ができたからだ。

それまで、父親の指導の下、練習、大会に参加していたが、鹿島台町（現大崎市）のササキプロレーシングに所属し、本格的な体制でレースに参戦した。その成果は実り、中3までMX東北選手権ジュニアクラスで5連覇の偉業を達成。

「5連覇できたのは、チー

ムと家族のおかげ。当時の東北地区はレース環境があまり整っておらず、関東圏と比べレベルが高くありませんでした。自分が天狗にならないよう、レベルアップできるように、積極的に関東圏のレースに参加させてくれました」

その後は、順調にステップアップ。国際A級に昇格し、年間順位を11位まで上げた。

1990年代、米国でジャンプしながら、ハンドルから手を離したり、バイクを寝かせたりして観客へアピールするフリースタイルモトクロス（以下、FMX）がやはり始まった。

ちょうどこの頃、MXに限界を感じ始めていた鈴木は、FMXへの挑戦を決意した。周囲は猛反対。しかし、決意は揺るがなかった。FMXにかける思いを関係者にぶつけ理解を得た。

「MXは一人ではできないスポーツ。家族、チームやスタッフがなくて成り立っていません。その人たちには理解してもらいたかった」と振り返る。当時のスポンサーヤマハ発動機は、現在もバイクを提供。また、当時の仲間も暇を作っては応援に訪れている。

転向直後、日本には専用練習場はおろかコーチすらいなかった。鈴木は、全てが手探りの状態で2002年にアメリカのFMXの大会に初挑戦。しかし結果は惨敗。その時に手を差し伸べたのが、同じくFMXを始めたばかりの佐藤英吾だった。二人はFMX専用練習場を自力で作り、新しい技を身につけるため切磋琢磨。そして、世界で数人しかできなかった「バックフリップ」を成功させ、05年の世界大会で初優勝。佐藤も09年に年間総合3位を獲得した。

13年3月に「X-FIGHTERS 2013」第1戦に二人そろって出場が決定。世界的ライダーとなった二人は、同大会へ照準を合わせ、練習に打ち込んでいた。そんなところに突然の訃報。佐藤が練習中の事故で帰らぬ人となった。

「英吾君が亡くなったのは悲しいけど仕方ないこと。人間いつかは最期の時を迎えるので」

淡々と語るが佐藤に対する思い入れは人一倍。その証拠に、ライダーたちの技を支えるランプ（ジャンプ台）と鈴木の体の中には「EIGO SATO」が刻まれている。



- 3) ファンサービスも丁寧に対応する。どんなに忙しくても笑顔で応える。FMXライダーの中でも人気は1、2を争う
- 4) 鈴木と二人三脚で、日本のFMXシーンをゼロから開拓してきた故佐藤英吾。「EIGO SATO」はいつまでもライダーたちと共にいる